

官立宇部工業専門学校

終戦直後の学園

終戦後間もない昭和20(1945)年9月20日、官立宇部工業専門学校(以下、宇部工専)から3年生364名が混乱を極める社会へと送り出された。動員先の工場や鉱山から復学した1年生、2年生の授業は9月から再開されたが、終戦直後の虚脱状態や悪化した食糧事情などにより、まともな授業は望むべくもなかった。



昭和22年の工専校舎

同年12月4日、戦時中に軍国主義に加担し、故意に学生達を締め上げたと言われた教官たちの追放を学校当局に要求すべく、武道場で学生大会が開かれた。ストライキが決議され、学校側が学生の要求を全面的に受け入れる結果となり、当時の村山梅吉校長は「責任のすべては自分にある」と明言した。この年は冬休みが繰り上げて実施され、学期末試験も延期された。

昭和21年1月、戦地から復員した旧制中学卒業者を一時的に収容するため、化学工業科に修業年限1ヶ年の専修科を併設した。また、陸軍士官学校、海軍兵学校など軍関係学校や、外地の専門学校に在籍していた学生たちも編入や転入学してきたため、当時の各クラスは個性あふれた若者たちの集団となった。同年4月、戦後の精密機械工業の必要性から、機械科に精密機械分科が設置された。

初の女子学生入学

戦後の教育改革で女子教育の振興が進む中、各校で男女共学がスタートしはじめていた。宇部工専でも昭和22年4月、初めて3名の女子学生が工業化学科に入学した。3名とも地元の県立宇部高等女学校(以下、宇部高女)の出身であった。実はこの入学に先駆けて、宇部工専の学生数名が宇部高女に乗り込み、体育館に女生徒を集め宇部工専の宣伝と受験の勧誘を行った。ちょうど当時、ノーベル物理学賞と化学賞を受賞したマリー・キュリーの伝記映画「キュリー夫人」が映画館で上映されており、「マダム・キュリーを目指す者は来たれ！」との呼びかけが功を奏したのか、翌年の春には初の女子学生を宇部工専に迎えることができたのである。

ちなみに、女子学生のうちの一人は、受験生中トップの成績だったという。

物資の不足と整備

宇部工専の校舎は幸いにも戦災を免れたが、戦後の物資不足は深刻で、教育のための設備整備はままならない状況であった。このため旧軍や軍需工場からの払い下げ物資も活用し整備を図った。

戦後、徳山海軍燃料廠の地下壕に外国学術雑誌や専門書が放置されたままになっていることが分かり、外国文献の不足に苦慮していた宇部工専では早速徳山まで引き取りに向かった。これら資料は、当時としても大変貴重な文献で、宇部工専の大学昇格審査の際にも、評価のポイントとなったという。移管手続き後は、「旧徳山海軍燃料廠移管図書」として山口大学附属図書館の工学部分館に保管され、長らく学内外の利用に供された。現在これらの図書は、周南市立中央図書館へ移管されている。



旧徳山海軍燃料廠移管図書を保管していた書庫
当時の工専唯一の不燃性の建物である。

山口大学工学部へ

新学制の実施に伴い、昭和23(1948)年1月、市の有力者たちが名を連ねた「宇部工専大学昇格後援会」が発足し、大学工学部として要求された研究施設や実験設備の充実に資金を提供するなどの、組織立った支援がなされた。

昭和24年5月31日、山口大学が開学し、宇部工専は山口大学工学部として新たなスタートを切った。昭和26年3月8日、宇部工専最後の卒業式が挙行された。これにより、昭和14年の宇部高等工業学校(以下、宇部工高)以来、3,000名を超える卒業生を戦中戦後の混乱の世に送り出した宇部工専は幕を閉じることとなった。

湯川秀樹博士来校

昭和22年6月6日、京都大学の湯川秀樹博士が来校し、「現代の物理学」と題して講演した。中間子理論により世界的に著名であった博士の姿を見ようと、多くの学生たちがその講演会に参加した。2年後の昭和24年、湯川博士は日本人として初めてのノーベル物理学賞を受賞した。

校長官舎前で

左から山本武夫教授、湯川秀樹博士、
村山梅吉校長、松山英太郎教授



学生たちの青春

終戦後の物資不足や食糧難の中でも、学生たちは寮祭や学内講演会や演奏会、運動会などを積極的に催し、青春を謳歌した。これらの催しには、町からも多くの人たちが常盤台へと足を運んだ。

また、この時代の学生の最大の楽しみは映画であった。学生たちは「宇部セントラル劇場」や「新川座」などの映画館に足繁く通った。学生の料金は安く、50銭位であったという。月2回、渡辺翁記念会館で上映されたフランス映画やアメリカ・ハリウッド映画などの洋画は学生たちの西洋文明に対する乾きを癒した。



(上) 運動会での仮装行列

(右上) 放課後のバスケットボール

(右中) 寮祭での演劇

(右下) 新川座

同窓会の発足

同窓会は、昭和16(1941)年の宇部工高の時代からすでにその設立が計画されていたが、戦争により頓挫していた。昭和21年11月、卒業生有志の間で同窓会設立の気運が高まり、母校在職者が中心となって、「宇部工専同窓会」を正式に発足させた。昭和22年5月、開校記念日に合わせて同窓生の集いを催し、学内公開の展示物や創立記念日の出し物であった演劇の中で優秀なものに対し同窓会賞を贈った。この後も、図書館整備資金や校史編纂のための寄附金集め、運動会・寮祭への協賛、大学昇格運動の支援など、多方面にわたって母校の活動と発展を支えた。

昭和28年4月、大学昇格後初めての卒業生が巣立ったのを機に「宇部工専同窓会」は発展的に解消され、宇部工高・工専と新制工学部の全卒業生を対象とする同窓会「常盤工業会」が発足した。